

# ♪ シニア便り ♪



第 7 号 (2005年10月発行)

発 行 北海道シニア吹奏楽団 事務局

編 集 『シニア便り』編集部

## 新入団員が「OH!イ・シニア」

ホルン 松浦 弘

先日北海道新聞のコラム「卓上四卒」で、我々に大いに参考になることが書かれていたのでここに引用させてもらいたいと思う。米大リーグの日本人選手として投打の実績的な先駆者である野茂投手とイチロー外野手が、そろって大記録を達成した。野茂は日米通算二百勝、イチローは大リーグ通算二千安打という偉業だが、はしやくととはなかった。「シーズンの最後までいい投球をしたい」と語ったのは野茂だ。「プロというのは……いい成績を何年も続けて残さなければいけない人間ですから」と自著『ドジャー・ブルーの風』で信念を述べている。だとすれば記録は通過点にすぎない。イチローの談話は「ヒットは重ねるたびに難しくなる」だった。本人にしか分からない打撃術の境地があるのだろう。悪くない打撃なのに、総立ちのファンには「今の成績では応えるべきでない」と、派手な反応を示さなかったのもイチロー流である。

野茂は四十歳を過ぎても投げ続けることが目標という。イチローには打率四割台への挑戦がある。パワーとスピードなどで最高レベルの大リーグで実績を重ね、それでも妥協せずに常に上を目指す。二人のすごいところだ。目標や志の高さも先駆者の条件だ。プレーを見る側もそこからなにかの勇気をもつ。

## 『OH!イ・シニア』作曲に寄せて』

ホルン 勘米良 二六生

「戦後六十年」の今年、国内外の様々案な所で関連の催しが行われている節目の年です。私は、この五年前の一九四〇年生まれで、シニア入団は平成八年二月、在籍九年半です。

又、一方、国で公認の老人で早速介護保険料を納めて、今年一月には孫も生まれて正に爺サマとなりました。そんな心境の中、今年もシニア恒例の総会が開催され、その後懇親会へと移り団長も出席。私も今回は団長の隣の席に位置し、話が進む中、団長の弾む声に「元気が戻ってきた」と私は思っていました。会も後半に入った頃、団長から「オイッ勘米良君、一寸頼みたい事があるんだが……ハッ、何でしょうか」「君に国歌を作ってもらいたいんだがネ」エッ。私もすぐの返事に困りました。が、「あー。どういふ風な形式ででしょうか」とたずねますと、「いや君にまかせろヨ」という事でしたので、後日この事について大先輩の吉田氏（〇b）に話を是非にと歌詞（作詞）の依頼をしたところ、一週間足らずの或る練習日に早速歌詞をいただき読んでいくうちに、ご本人を始めシニアの様子、心意気等その他ユーモア溢れる文面に私は迷わずに「これは音頭風にやってみれば面白いかも知れませぬヨ」と申し上げますと、これ又私にまかせろという事で

したが、実はおまかせコースはやり易いようでやり難い面もあり、特にコーダ付きの歌詞のメロディに悩みました。伴奏一歌、伴奏一歌という単純なものでなく、ブレイヤールもお客さんも楽しんでもらうため、私なりに工夫して出来上がったのが「OH!イ・シニア」です。曲のタイトルは、氏と高橋さんが名付けました。曲について一〇〇%の支持は思ってもいませんが、元来のシニアのイメージ、歌詞、シニア風という信念の元、心をこめて作りました。

高齢化社会の中、私の今は、ラッパ吹いてきて良かったと思っております。爺サマなどと思つてないし、呼ばれたたくもありません。私は、これからも常に音符と共に有り、をモットーに人生を歩みます。

## 『定期演奏会実行委員会に参加して』

実行委員長 林 重男

第十一回定演終了後間もない練習日に十七年第十二回定演実行委員会のメンバーを募集すると渡辺事務局長より話がありました。入団して足掛け三年、団員としてようやく認められるようになったし、ここで少しは団の為に役立てればと思ひ、お手伝いさせて下さいと立候補しました。

一月十五日に第一回の実行委員会が開かれ、委員の皆さんから委員長に推さ

れて受ける事になり、入団後まだ日も浅いののに年の功だ！と引き受けてしまいました。中村副団長、渡辺事務局長、高橋次長をはじめ、小西、近藤両委員のスタッフでスタートしましたが、練習後毎回集ってはワイワイとやっているうちにだんだん骨組みが出来上がってきて、そのうちに曲が決まり共演の宮の森小学校スクールバンドも決まって、練習もだんだん熱を帯びてきている今日この頃です。あとは演奏会当日の服装をどうしようか、みんなで気取って燕尾服なんかいいぞ！なんて冗談も出ています。

気楽な事を言っているようですが、内実はそうではありません。先輩方の残した実績の跡追いをしながら、チェックに次ぐチェックを重ね、曲を決めるまでの紆余曲折もあり事務局のアドバイスを受け、コンサートマスターの阿部さん、鈴木さん、菊田さんらに助言と会議への参加を仰ぎ、前年度実行委員会にもいろいろ教えをいただきました。司会者も知人の岡本紀代子さんをお願いして承諾を得ました。何となくさんの人の力がハモニーしているのでしょうか！これこそ、我がシニア吹奏楽団の真骨頂と自画自賛しています。あとは演奏会当日、たくさんの方が見に来てくれれば言うことなし、どうか皆さんで一人五枚のチケットを分担して売り上げて下さい。多くの知人・友人に声を掛けてください。プログラム

の広告募集に協力をお願いします。日頃

から広告を出してくれるようなところに目を付けておいて下さい。五百席を満席にしましょう。そして来年も新しい人が実行委員に気軽に参加し、みんなで作る定期演奏会がいつまでも続いていく事を願ってやみません。

### 『惜別の辞』

前・クラリネット 花野 瑞穂

今日は八月二十一日(日曜日)、外気温は二十四度。十五年程前に購入して船橋新郷、札幌、帯広、市川、札幌、旭川と持ち回り、また船橋に辿り着いた窓用エアコンが辛うじて壊れずにガーガー鳴り響いている部屋の中でこれを認めています。

退団して早三ヶ月が経ちましたが皆様におかれましては如何お過ごしでしょうか。中村先生の熱い指導のもと二ヶ月後の定期演奏会に向け、鋭意練習に励まれていることと推察致します。私は、残念ながらまったく音楽から遠ざかってしまいました。今は休日も含めて毎日毎日調査研究に没頭しています。というはずいぶん格好良いのですが、何と云うことはなく日が一昨日あちこちの道路を眺め眺めして、「この道路もつと良い使いみちはないかいな」と呆けつと考え込んでいるに過ぎません。そつ易々と芽の出る企画が生まれる訳もなく、着任以来一向に捗らぬ状況に些か焦っております。

私は今五十歳です。心身ともに急激な衰えを強く感じてはおりますが、今の内に何とか仕事のうえで成果を自分が納得いくかたちで出しておきたいという気持ちで強く、転勤・出向を志願し上京した次第です。北海道での勤務もそれはそれで社会に役立つ様真剣に取り組んで参りました。でも、自分の一番得意な分野を活かせるものではなかったのです。先の事は判りませんが、現在の勤務先はともかくとしてしばらくこちらで仕事をしたいと思っております。また、リタイア後は長く続けている国際ボランティア活動にさらに一歩踏み込んで社会のお役に立てればと考えております。そんなこんなで再び皆様と共に活動させて戴くことはもう出来ないかもしれせん。私が転勤族で何時何処に飛ばされるかも知れない身でしたので、責任を全うする自信が持てなかったこともありどうとう実現できませんでしたが、演奏会のプロデュースを独断的にやってみたいと本気で思っております。それから、普段の活動についてご提言あるいはご提案したかったことも幾つかありました。でも、それをここで述べるのはやめておきます。それは、自ら率先して実行してこそ皆さんにご理解戴けることだからです。単にここに記しても、負け犬の遠吠えの様にしか受け止められかねません。

名残惜しくは存じますが、これでお別れさせて戴きます。皆様のご健勝と北海道シニア吹奏楽団の益々のご発展をお祈り致しております。ご機嫌よう。

『シニアで過した十年を振り返って…』  
前・アルトサククス 出野 実月

「音楽は好きだけど、他にもやりたいことがいっぱいあつて…でもちよつとくらは音楽に関わっていたい」シニアはそんな私にピッタリのバンドでした。

\* \* \*

### ●林団長との出会い

中学校の吹奏楽部でクラリネットを吹いて以来、何年もの間音楽からかけ離れた生活をしてきた私は、ある時ふと思ひ立ちキクヤ楽器にアルトサククスを習いに行くことにしました。当時の講師は林先生。プロになる訳じゃないんだから楽しく吹けばいいんだ！SAXの吹き方よりもまずはそのことを教わりました。

### ●入団

一年くらい習い、少し吹けるようになってきたからそろそろどこかのバンドをさがそうかな、と思ひ始めた頃、林団長からシニアを紹介していただき、見学に行きました。練習日が日曜ということだから迷いましたが、夜ならまあいっかと思ひ(当時は十八時からの練習でした)入団。最初のうちはちゃんと練習に参加していたのですが…

### ●倦怠期

しばらくして、練習時間が十三時から変更になりました。当時まだ若く遊びたい盛りだった私にとって、休日の昼間は外に出かけるための貴重な時間。だんだん練習に参加する回数が減っていき…次の演奏会が終わったらもうやめよう！そう思っていると、林団長に「もつやめるのかい？」と聞かれ(見破られちゃいました！)とつさにハイとは言えず、結局やめられないまま時は過ぎていきました。

### ●すこい進歩

練習日おかまいなしで他の予定を優先させながら何年か続いているうちに、だんだん練習日にみんなと一緒に楽器を吹くことが楽しみになってきました。早朝ゴルフの後やジムで走った後、土日のキヤンプから直行したこともありましたが、遅れてでもいいからできるだけ練習に参加したいと思うようになりました。すこい進歩でしょ？

### ●自分のペースで楽しく！

月に二回だけ楽器のフタを開け、その他の日は音楽以外の趣味や仕事やいろんなことに充てて…こんなに気軽に音楽を楽しむことができるバンドは他にないと思ひます。犠牲にするものが多ければ、音楽を楽しむどころか負担にさえ感じてしまっていたかも知れせん(※他のこ



とを犠牲にして必死で練習した期間が数年前に一瞬だけありましたが……。気がつくくと、シニアは私にとつても居心地の良い場所となっていました。

\* \* \*

私は八月から東京に住むこととなり、残念ながら練習に通うことができなくなっていました。これまでの貴重な経験を忘れずに、今後はずっとシニアを応援していきたいと思えます。シニアはいろんな人がいろんな形で音楽を楽しんでいるので、できる限り続けて欲しいと願っています。長い間ありがとうございました。

#### 『私の吹奏楽雑記帖』

副団長・常任指揮者 中村 暁 生

#### (四) 音階は名曲である

一ヶ月間の特別訓練の内容は音楽理論唱譜聴音、写譜、吹奏行進などがありましたが、最も重要な課目は担当楽器の個人練習で、当時は旧戸山学校軍楽隊で使われていた「各個練磨」という用語がそのまま使われていました。訓練は夏も冬も豪雨や強風以外は全て野外で立奏、旧軍出身の助教が竹を削って作った指揮棒を持って進捗状況を見に来るわけですが、姿勢が悪かったり運指を間違えたりするとその棒で頭や指をビシビシ叩くといったスパルタ式教育でした。

各個練磨は先ず最低音から可能な最高音までを半音ずつ、pp〜ff一音十〜十五秒吹くロングトーンから始めますが、これは初心者にとって良い音色と正しい音程の形成、音量の幅と音域の拡大のためには、退屈で根気の要る作業ですが最も有効な方法だからです。ロングトーンが終わると次は音階、十二個の長音階と同じ個数の旋律的短音階の暗譜です。訓練終了試験では無作為に「はい、君は何調長音階と何調短音階」と言われて即演奏しなければならぬからです。

初代中央音楽隊長の須藤洋朔先生は口癖のように「音階は名曲である。どんなに難しいパッセージも殆ど音階から出来ている」と言われ音階のマスタを義務付けていました。このことは後にホルンに転向しオーケストラで各種の調に瞬時に対応する時に大変役に立ったのです。

音階練習の他に「君が代」をはじめ式典用の曲や吹奏行進曲の暗譜、合唱曲の練習もあるわけですから当然時間が足りません。メシ・フロを大急ぎで済ませ、力道山が空手チョップを連発するテレビを観たいのをジッと我慢、毎晩八時まで外灯の下で各個練磨に励んだものです。当時の練馬駐屯地の周り是一片の大根畑、その向こうの豊島園の杜が見え、だだっ広い川越街道はたまに車が通るだけ、焼酎の梅割が一杯十五円という時代でした。

『わが友「栗田 晃」』

トランペット 鈴木 健一

「栗田 晃(くわた あきら)」という方を存知ですか？ 最近「バンドジャーナル」や「バイパス」などの裏表紙に載っている、目の細い腹の出た人です。一緒に金管五重奏を組んで仕事をし、遊んだ親友なのですが、彼のエピソードの一部を紹介したいと思います。

#### ●師匠

栗田君と私は、山下晴生先生の門下生です。山下先生は、「山下晴生とゲイスターズ」というビックバンドでトロンボーン奏者として活躍しました。理論と指導力は、並外れて卓越しています。栗田君のプロフィールには、師事した先生の名前の最初に必ず「山下晴生」と書いてあります。それだけ影響力があったのでしょう。

#### ●出会い

高校時代、吹奏楽連盟主催のソロコンクール北海道大会で、彼は私の次に演奏しました。その後、大学受験で再び会いました。

#### ●師匠飛び蹴り事件

私達が大学入試のとき、なんと師匠に東京まで随行していただきました。そんな切羽詰まったときに事件は起きまし

た。試験前日、皆が練習室に閉じこもりピアノの試験曲を練習していました。栗田君は、試験の緊張の余り練習曲の途中で止まってしまいました。すると、師匠は廊下の向こうから全速力で走り、ドアを開け栗田君の横腹に飛び蹴りを入れました！ 彼はそのお陰で入学できました。

#### ●カマドーマ事件

先日、札幌で音楽の研究会有り、山下門下の田中さん(現在、伊達高校教諭)とお酒を飲んでいました。そのとき、とても恐ろしいことを聞きました。「俺、トロポーン会の合宿のとき、栗田にカマドーマ食わしたんだよな」といい、「カマドーマ」って何だろうと考えていました。イタリア料理か高級珍味かと考えていると、田中さんは教えてくれました。「ヒゲの長い便所コウロギだよ！ かまどうま！」 ゲーツ!!

#### ●現在

現在は一兎のとってもよいパパです。日本のトロンボーン界を代表するブレイヤーに成長しました。現在は国内では一番上手です。お腹もすくすく成長しています。いつもポーツとしていてドジな彼ですが、人間的に憎めないですね。みなさんご声援よろしく！

編者長の

シニア徒然草



(一) 加藤恕彦さんのこと

皆さんは、加藤恕彦(かとう ひろひこ)というフルート奏者を存知ですか？ 彼は一九三七年(昭和十二年)の生まれで、林リリ子と吉田雅夫(いずれも故人)に師事し、パリ音楽院のフルート科と室内楽科をそれぞれ一等賞(フルミア・プリ)で卒業後、弱冠二十三歳でモンテ・カルロ国立歌劇場管弦楽団の首席奏者に就任します。折しも、小澤征爾や岩城宏之ら、当時のわが国の若手音楽家が独自の感性で西洋音楽の表現を世に問い始めた時期とも重なり、彼は将来を大変囁望されていました。

しかし、これから華やかに展開したであろう彼の演奏家としてのキャリアは、突然悲劇的に終わりを告げます。一九六三年(昭和三十八年)八月十四日、半年前に結婚したばかりのマーガレット夫人とともに、彼はアルプス・シヤモニー方面への旅に出るのですが、二日後の十六日に二人はモンブラン山中で消息を絶つてしまいます。そして、二度と生きて戻ることはなかったのです。

では、なぜ私が加藤さんのことを皆さんに紹介したいと考えたかと申しますと、彼がパリ音楽院に在学するかたわら、ニースの国際音楽アカデミーに参加するな

どしてさらなる研鑽を積んでいた一九五八年(昭和三十三年)に、私達が今回の定期演奏会で演奏する「アルルの女」の舞台となったプロヴァンス地方へ二度にわたり旅し、現地で感じた印象を手紙に残していたからです。その手紙の抜粋は、CD(ジネット・ヌヴイ協会シヤボン制作「加藤恕彦ラストコンサート一九六三夏」SGNJ-1009)の解説書に収録されています。前途有望な若き音楽家がこの曲の舞台の一つとなった地で感じた旅の印象に接するのも、あながち無意味なことではないかなと思ひ、ここに解説書の写しを掲載させていただきます。

あらためて申すまでもないとは思いますが、文中にある「ドーデーの「風車小屋便り」とは、ビゼーが音楽を付けたアルフォンス・ドーデーの戯曲「アルルの女」のもととなったエピソードが収録されている短編集のことで、カマルグという農村の旧家の長男フレデリが、アルルの町の闘牛場で知り合った一人の「女」への恋心と嫉妬の果てに自殺をしてしまふという物語ですが、「女」は劇中に一度も登場せず、名前すら判らないという、ちよつと変わった筋立てです。(次ページに続く)



## 加藤恕彦

## ドーデーの風車小屋

今年の夏、ニースでウーブラドゥスの主催による Académie Internationale de Musique という夏期講習があり、これに出席致しました。Violin のシェリングとか、作曲のチェレパニン、ハーブのラスキーヌ等、欧米の有名な先生方が教えておられ、そんな中で、しかも、地中海の都、ニースで勉強できてとても幸せでした。中でも、フルートの先生がラムバルで大変な勉強をいたしました。

このニースに居る時に、丁度マントン(ニースから汽車で40分)で音楽祭が始まり、ニースから通ったり、ニースの講習の済んだあとは、マントンにいるフランス人のフルート吹きの友人の家に泊めてもらったりして、面白いものはみな聴きました。

このニースの講習の前後2回にわたってプロヴァンス地方を旅しました。まずアヴェニオンでは古い法王廟の中庭で演じられる芝居の festival を見、オランジュという街のローマ時代の劇場も見ました。次いでアルルに参りました。この街は、本当にしっとりとしたよい街でやはりローマ時代の闘技場や劇場、それに古い回廊等がありますが、街そのものの雰囲気はどことなく大好きです。そして、丁度真夏の40度近い炎天の中を、アルルから10km 位のところにある「ドーデーの風車小屋」を訪れました。ここは、ドーデーの「風車小屋便り」の舞台で彼自身この付近に住んでいたらしいのです。アルルから歩いて行くと、ほとんど黒いほど青い空、ミストラルというプロヴァンス特有の強い風——これが昔は風車を回して、麥を挽いていたのだそうで、僕が今読んでる「風車小屋便り」に度々出て来るので、ミストラルがどんな意味を持つかをここを歩いてはじめて身にしみて感じました。——燃えるような糸杉、ボキボキとまぶしく光る麥の穂、白い岩、岩、岩、……考えまいとしたってゴッホの絵自身の中に居る様で、丁度「アルルの女」のあの自殺した若者が、毎日、日が沈むころ、アルルの教会の塔の見える所迄出かけていったというその道をたどりました。本当にプロヴァンスは今迄見たどこよりも、僕の血を湧かせるものがあります。白い岩の上にあおむけになって、熱く乾いた光をあび、せみの声、ミストラルのうなるような歌をきいて目をつぶっていると、血がもえる程あつくなくて、胸がしめつけられる様でいながら、ものすごく落ち着いて静かな底の方へ沈んで行く様な不思議な気持ちになります。

(パリ 1959年9月19日/師吉田雅夫教授に宛てた手紙から抜粋)

(前ページより続く)

さて、前述の彼のCDに耳を傾けてみますと、収録されているパツハの「管弦楽組曲第一番」もモーツアルトの「フルート協奏曲第一番」も、ともに音楽する喜びに満ちた、聴き手を魅了してやまない演奏が展開されています。特に演奏会のライブ録音である前者は、終演後の客席がまるで盛大に曲を閉じる大交響曲を演奏した後のような拍手喝采に満たされておられ、彼がいかに当時の聴衆に鮮烈な印象を与えたかを如実に物語っていると言えましょう。ちなみに、彼がここで愛用している楽器は、ボストンのヘインズ社による銀製の楽器で、ミュンヘン国際音楽コンクールで二位に入賞した際に受け取った資金で特注したものだそうです。加藤さんのことについてはまだまだ書きたいことがあります。紙幅が尽きてまいりました。最後に、皆さんの心の片隅にでも「加藤惣彦」という名前を刻んでおいていただきたいことと、彼が感じた旅の印象が今後の私達の音楽づくりにほんのわずかでも一助となればと願いつつ、この拙文を結びます。

### チューニング広場

後任の監事が決まりました

去る八月二十八日(日)に開催した役員会において、出野さんの退団により空席となっていた監事の後任に、林重男さ

んを選出いたしましたので報告します。

初の試み!

パークゴルフ付き呑み会、

ここに敢行

去る七月三十一日(日)、シニア吹奏楽団が恐らく始まって以来の企画として、パークゴルフ+ジンギスカンによる呑み会を南区藤野の「エルクの森パークゴルフ場」にて実施しました。ホルン&トランペットパートの企画によるもので、勘米良さんが発案し、筆者が諸々の雑用を買って出て参加者の募集がスタートしました。一体どのくらいの参加があるだろうかと、やや不安な思いを抱きつつ連絡を待っていたところ、締め切りを過ぎた後もポツポツと参加の意思表示があり、最終的に参加者は十五人となりました。今回の定演で司会を務めていただく岡本紀代子さんも、参加を申し込んで下さいました(ー)。あとはお天気に恵まれるかどうかです。雨天の場合はジンギスカンのみの実施ということにしましたが、直前まで雨模様の日があり、大いに気を揉みました。しかし、当日は薄曇りがかかるものの雨の心配は全く無い天候になり、野外でプレーするには過こしやすすい日和となりました(自称「暗れ男」さんのお陰でしようか!?)。

参加者を一チーム三人ずつに分けて計五チームを作り、十二時より人数の揃ったチームから順次プレーがスタートしま

した。経験者もいれば初心者もおり、コースのあちこちからは一喜一憂の歓声が沸き上がっていました。終了後はジンギスカンをつつきながら、参加者一人当たり四百円ずつを集めて用意した景品の贈呈式を、一位から三位までとブリーフ賞の方に対して行いました。スコアの集計には林さんの協力をいただきましたが、その場で何かのポスターの裏側に手書きされた集計表の一番上には「第一回」と書かれてありました。どこからともなく「また来年もぜひやりたいね」との声が聞こえ、「今回のスコアをもとにハンデイをつけましょう」という話も出ていました。今回参加された皆さん、諸事ご多忙の中をお集まりいただき、本当にありがとうございました! また、あえてお名前を挙げませんが、車での送迎を引き受けてくれた方や、集金と支払いを手伝ってくれた方にも、この場を借りてお礼申し上げます。(近)

### 親睦会のお知らせ

毎月恒例の呑み会です。日程は次のとおりです。気軽にご参加ください!

- ・ 詳細は幹事よりお知らせします。
- ・ 参加申し込み、問い合わせは幹事までどうぞ。
- ・ 定期演奏会終了後の打ち上げについては、別途お知らせします。

### ★今後の担当幹事★

- 10月: ユーフォ・チューバ
- 11月: フルート・オーボエ
- 12/10 (土) <忘年会>:  
クラリネット
- 1/21 (土) <新年会>: サックス
- 2月: トランペット
- 3月: ホルン

### 《編集後記》

シニア便りの第七号、いかがでしたか? 盛りだくさんの内容になり、ページも増やしました。退団された花野さんと出野さんからも、原稿をいただくことができました。今回原稿を寄せいただいた現団員ともども、ご多忙にもかかわらず当方の依頼を快諾いただき、深く感謝申し上げます。

花野さん、出野さんともに、それぞれのシニアに対する思いや近況などを伺うことができました。花野さんが心に抱いていたシニアに対する提言や提案等を窺い知ることができたのは、ご本人の意思に関わることでありやむを得ないところだと思えますが、出野さんが述べていた「シニアは、いろんな人がいろんな形で音楽を楽しむことのできる場であり続けて欲しい」という願いは、私も一団員として忘れずにいいたいと思わずにはられません。(編者)